

## グループ回想法の介入効果

—特別養護老人ホーム入所者の生きがい感—

ツグ リエコ  
津田 理恵子\*

**目的** 先行研究において、回想法介入による効果の確認を、生きがい感スケールを用い、長期的にその効果を検証している研究は見当たらなかった。そこで、特別養護老人ホームでクローズド・グループによる回想法の介入を試み、生きがい感スケールを用いて、多層ベースラインで調査を実施し回想法の介入効果を確認することを目的とした。

**方法** 特別養護老人ホームに入所している高齢者13名を、A組・B組・C組の3グループに分け、1グループにつき5週間ずつ、介入時期を2カ月間ずらしてグループ回想法を実践し、生きがい感スケールを用いて2カ月ごとに5回（10カ月間）測定した（多層ベースライン）。

**結果** 生きがい感スケールの得点と生きがい感スケールの下位項目の得点について、3（グループ；A組，B組，C組）×5（時期；1回目，2回目，3回目，4回目，5回目）の分散分析を行った。その結果、交互作用に有意な傾向が認められた（ $p < 0.06$ ）。多重比較を行った結果、A組では1回目と2回目の間（ $p < 0.03$ ）、B組は2回目と3回目の間（ $p < 0.03$ ）、C組では3回目と4回目の間（ $p < 0.04$ ）に有意な改善が確認できた。有意な差がみられた時点は、それぞれ回想法の介入直後であった。さらに、生きがい感スケールの下位項目では、「私には施設内・外で役割がある」「世の中がどうなっていくのかもっと見ていきたいと思う」「私は家族や他人から期待され頼りにされている」の3項目に有意な改善が示された。

**結論** 回想法の介入によって、特別養護老人ホーム入所者の生きがい感の向上に効果があることが確認できた。日々の生活における余暇時間における活動として、回想法は、個人の懐かしい記憶に働きかける個別性が尊重された支援であると示した。

**キーワード** グループ回想法，特別養護老人ホーム，生きがい感，多層ベースライン

### 緒 言

回想法は、アメリカの精神科医 Butler<sup>1)</sup> によって提唱された理論である。Butler は、人は死が近づくにつれ、過去を回想する頻度が高まるが、高齢者自身が自分の歩んできた人生を振り返り、その意味を模索しようとすることは、自然で普遍的な過程で、このような高齢者の回想に対し、共感的・受容的態度で意図的に介入することで、老年期の最終課題である人生の統

合が達成できる可能性が開かれると提唱している。

Butler が、回想法を提唱して以後、高齢者の過去への回想は積極的に行うことが望ましいという考えに転換され、回想法を活用した研究が、北欧やイギリスを中心として数多く行われ、その理論は広がりを見せ、わが国では、1990年代になってから、回想法研究がスタートし、保健・医療・福祉など多岐にわたる分野で研究が行われている。

回想法の効果として、Webster<sup>2)</sup> は、亡くなった人や現在関わりを持たなくなった人の思

\* 神戸女子大学健康福祉学部准教授

い出を生きがいとするもので、Haight<sup>3)</sup>は、特別な人との思い出を生きがいとすると示している。

しかし、先行研究において、回想法介入による効果の確認を、生きがい感スケールを用い、長期的にその効果を検証している研究は見当たらなかった<sup>4)</sup>。

そこで、特別養護老人ホームでクロズド・グループによる回想法の介入を試み、生きがい感スケールを用いて、多層ベースラインで調査を実施し回想法の介入効果として、生きがい感との関係を明らかにし、回想法が高齢者の生きがいにつながる支援であるか検討することを目的とした。

## 研究方法

### (1) 調査対象

特別養護老人ホームに入所している高齢者13名で、対象者の特性を表1に整理した。対象者

表1 対象者の特性 (n=13)

| グループ        | 氏名:性別 | 年齢(歳) | 平均年齢±標準偏差 | NMスケール・5項目評価得点(点)・(評価の指標) | N-ADL得点(点)(50点満点) |
|-------------|-------|-------|-----------|---------------------------|-------------------|
| A組<br>n = 5 | A:女性  | 85    | 87.4±7.9  | 39(軽度認知症)                 | 27                |
|             | B:女性  | 83    |           | 39(軽度認知症)                 | 29                |
|             | C:女性  | 97    |           | 50(正常)                    | 34                |
|             | D:女性  | 95    |           | 27(中等度認知症)                | 32                |
|             | E:男性  | 77    |           | 45(境界)                    | 43                |
| B組<br>n = 4 | F:女性  | 89    | 87.8±9.3  | 44(境界)                    | 34                |
|             | G:男性  | 84    |           | 49(正常)                    | 27                |
|             | H:女性  | 78    |           | 27(中等度認知症)                | 4                 |
|             | I:女性  | 100   |           | 39(軽度認知症)                 | 21                |
| C組<br>n = 4 | J:女性  | 89    | 82.8±9.7  | 23(中等度認知症)                | 9                 |
|             | K:女性  | 83    |           | 25(中等度認知症)                | 23                |
|             | L:女性  | 92    |           | 33(軽度認知症)                 | 28                |
|             | M:女性  | 67    |           | 45(境界)                    | 22                |

表2 回想法の介入と調査時期

|             | 2月・1回目調査 | 4月・2回目               | 6月・3回目               | 8月・4回目               | 10月・5回目          |
|-------------|----------|----------------------|----------------------|----------------------|------------------|
| A組<br>n = 5 | 介入直前     | 5週間 <sup>1)</sup> 介入 | 介入直後                 | 介入後2カ月               | 介入後4カ月<br>介入後6カ月 |
| B組<br>n = 4 | 介入前      | 介入直前                 | 5週間 <sup>1)</sup> 介入 | 介入直後                 | 介入後2カ月<br>介入後4カ月 |
| C組<br>n = 4 | 介入前      | 介入前                  | 介入直前                 | 5週間 <sup>1)</sup> 介入 | 介入直後<br>介入後2カ月   |

注 1) 介入期間

は、男性が2名で女性11名であった。平均年齢は86歳で、最低年齢が67歳、最高年齢100歳であった。対象者の選択は、特別養護老人ホームの介護職員に依頼し、了解を得られた13名で、13名を3つのグループ(A組・B組・C組)に分けた。

介入前の、N式老年者用精神状態尺度(NMスケール)の得点は、23点(中等度認知症)~50点(正常)で、N式老年者用日常生活動作能力評価尺度(N-ADL)では、日常生活動作においてほぼ全介助(4点)~ほぼ自立(43点)となっていた。

### (2) 研究プログラム

#### 1) 回想法の介入と調査時期

A組・B組・C組の3グループに2カ月ごとに評価尺度を用いた調査を5回実施し、それぞれのグループにグループ回想法の介入を試みた(表2)。A組は、1回目の調査(ベースライン)終了後に、回想法の介入を5週間実践し、介入終了直後(2回目)と終了から2カ月後(3回目)、4カ月後(4回目)、6カ月後(5回目)に調査を行った。B組は、1回目と2回目の調査(ベースライン)終了後に、回想法の介入を5週間実践し、介入終了直後(3回目)と終了から2カ月後(4回目)、4カ月後(5回目)に調査を行った。C組は、1回目・2回目と3回目の調査(ベースライン)終了後に、回想法の介入を5週間実践し、介入終了直後(4回目)と終了から2カ月後(5回目)に調査を行った。

#### 2) 評価尺度

対象者への直接質問による評価として、信頼性・妥当性が確認されている、近藤が開発した生きがい感スケール(K-式<sup>5)</sup>)を用いた。16項目の質問に対して、はい(2点)、どちらでもない(1点)、いいえ(0点)の3件法を用いて配点し、合計得点(最大32点)を生きがい感得点として算出した。質問の中に4項目の逆転項目が含まれていた。

- 3) 回想法介入期間  
週に1回(祭日を除いた), 60分間(14:00~15:00), 合計5回。  
A組:平成20年2月26日~3月25日の期間の5週間  
B組:平成20年4月15日~5月27日の期間の5週間  
C組:平成20年6月17日~7月15日の期間の5週間

4) 各回のテーマ  
対象者の生活歴を回想法介入前に聴取し, 対象者の特性を配慮した各セッションのテーマを選定した(表3)。

5) セッション  
クローズド・グループで実施し, 各回テーマに合わせた刺激材料として, 懐かしい音楽を開始前に流し, テーマに合わせた懐かしい品物に自由に触れてもらいながらセッションを行った。セッション中の約束として, スクール開始前に, 昔の懐かしい話をみなさんとたくさん話し, 楽しい時間を過ごしていきたいことや, 話したくないことは話さなくてもいいこと, スクール参加中の話はここだけの話とし, 他で話さないようにリーダーから説明した。

表3 各セッションのテーマ

|     | テーマ                 |                     |                     |
|-----|---------------------|---------------------|---------------------|
|     | A組                  | B組                  | C組                  |
| 1回目 | ふるさとの思い出            | ふるさとの思い出            | ふるさとの思い出            |
| 2回目 | 遊びの思い出              | 小学唱歌の思い出            | 盆踊りの思い出             |
| 3回目 | 小学校の思い出             | 遊びの思い出              | 遊びの思い出              |
| 4回目 | 初恋の思い出              | 青春時代の思い出            | かき氷の思い出             |
| 5回目 | 思い出アルバム作成<br>修了証手渡す | 思い出アルバム作成<br>修了証手渡す | 思い出アルバム作成<br>修了証手渡す |

表4 生きがい感の平均得点

|             | 1回目・2月 |      | 2回目・4月             |                   | 3回目・6月             |                   | 4回目・8月             |                   | 5回目・10月 |      | F値  | P値   |
|-------------|--------|------|--------------------|-------------------|--------------------|-------------------|--------------------|-------------------|---------|------|-----|------|
|             | 平均値    | 標準偏差 | 平均値                | 標準偏差              | 平均値                | 標準偏差              | 平均値                | 標準偏差              | 平均値     | 標準偏差 |     |      |
| A組<br>(n=5) | 16.8   | 5.8  | 24.0 <sup>1)</sup> | 3.8 <sup>1)</sup> | 20.4               | 9.1               | 21.0               | 6.5               | 19.0    | 5.8  | 2.1 | 0.06 |
| B組<br>(n=4) | 9.5    | 5.8  | 8.3                | 3.3               | 16.3 <sup>1)</sup> | 5.4 <sup>1)</sup> | 8.0                | 2.3               | 9.0     | 6.2  |     |      |
| C組<br>(n=4) | 16.8   | 4.3  | 14.5               | 3.4               | 10.5               | 5.8               | 18.0 <sup>1)</sup> | 5.7 <sup>1)</sup> | 15.8    | 5.7  |     |      |

注 1) 介入直後

6) セッティング  
場所は, 特別養護老人ホーム内の談話室を使用し扉を閉めて行った。スタッフとして, リーダー1名(筆者), コリーダー1~2名(介護職員), 逐語録2名, 観察スケール記入者2名, カメラ係1名, 準備と片づけ1名を配置した。

(3) 倫理的配慮

研究目的・方法・予想される損害と効果, 個人情報流出する恐れがないことなどについて, 個人情報保護法, 臨床研究に関する倫理指針(厚生労働省)を遵守し, 知り得た貴施設の個人情報を貴施設の許可なく発表, 公開, 漏えい, 利用しない旨について誓約書を記入し, 特別養護老人ホームの責任者の同意書による承諾を得た。対象者には, 介入目的と個人情報流出の恐れがないことなどを, 口頭により説明し同意書による承諾を得た。

(4) 分析方法

生きがい感スケールの得点と生きがい感スケールの下位項目の得点について, SPSS17.0を使用し, 3(グループ; A組, B組, C組)×5(時期; 1回目, 2回目, 3回目, 4回目, 5回目)の分散分析を行った。

調査結果

(1) 生きがい感スケールの得点

表4は, グループごとの生きがい得点の平均と標準偏差を示したものである。この表に基づいて, 3(グループ; A組, B組, C組)×5

(時期; 1回目, 2回目, 3回目, 4回目, 5回目)の分散分析を行ったところ, 交互作用に有意な傾向が認められた( $p < 0.06$ )。

多重比較を行ったところ, Aグループでは1回目と2回目の間( $p < 0.03$ ), Bグループは

2回目と3回目の間 ( $p < 0.03$ ), Cグループでは3回目と4回目の間 ( $p < 0.04$ ) に有意差があった。有意な差がみられた時点は、それぞれ介入の直後であった。

(2) 生きがい感スケールの下位項目の得点

1) 私には施設内・外で役割がある

表5は、生きがい感の下位項目である「私には施設内・外で役割がある」得点の平均と標準偏差を示したものである。この表に基づいて、分散分析を行ったところ、交互作用に有意な傾

向が認められた ( $p < 0.03$ )。

多重比較を行ったところ、Aグループでは1回目と2回目の間 ( $p < 0.08$ ) で有意な傾向が示され、Bグループは2回目と3回目の間 ( $p < 0.01$ ) で有意差があった。有意な差がみられた時点は、それぞれ介入の直後であった。

2) 世の中がどうなっていくのかもっと見ていきたいと思う

表6は、生きがい感の下位項目である「世の中がどうなっていくのかもっと見ていきたいと思う」得点の平均と標準偏差を示したものである。この表に基づいて、分散分析を行ったところ、交互作用に有意な傾向が認められた ( $p < 0.01$ )。

表5 私には施設内・外で役割がある

(単位 点)

|               | 1回目・2月 |      | 2回目・4月            |                   | 3回目・6月            |                   | 4回目・8月            |                   | 5回目・10月 |      | F値   | P値   |
|---------------|--------|------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|---------|------|------|------|
|               | 平均値    | 標準偏差 | 平均値               | 標準偏差              | 平均値               | 標準偏差              | 平均値               | 標準偏差              | 平均値     | 標準偏差 |      |      |
| A組<br>(n = 5) | 0.4    | 0.9  | 1.2 <sup>1)</sup> | 0.8 <sup>1)</sup> | 0.8               | 0.8               | 0.6               | 0.9               | 0.6     | 0.9  | 2.49 | 0.03 |
| B組<br>(n = 4) | 0.5    | 1.0  | 0.0               | 0.0               | 1.5 <sup>1)</sup> | 1.0 <sup>1)</sup> | 0.8               | 0.9               | 0.0     | 0.0  |      |      |
| C組<br>(n = 4) | 1.0    | 0.8  | 0.5               | 0.6               | 0.0               | 0.0               | 0.5 <sup>1)</sup> | 1.0 <sup>1)</sup> | 0.8     | 1.0  |      |      |

注 1) 介入直後

表6 世の中がどうなっていくのかもっと見ていきたいと思う

(単位 点)

|               | 1回目・2月 |      | 2回目・4月            |                   | 3回目・6月            |                   | 4回目・8月            |                   | 5回目・10月 |      | F値   | P値   |
|---------------|--------|------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|---------|------|------|------|
|               | 平均値    | 標準偏差 | 平均値               | 標準偏差              | 平均値               | 標準偏差              | 平均値               | 標準偏差              | 平均値     | 標準偏差 |      |      |
| A組<br>(n = 5) | 1.4    | 0.9  | 1.8 <sup>1)</sup> | 0.5 <sup>1)</sup> | 1.8               | 0.4               | 1.6               | 0.5               | 1.4     | 0.5  | 2.83 | 0.01 |
| B組<br>(n = 4) | 1.0    | 1.2  | 0.5               | 1.0               | 2.0 <sup>1)</sup> | 0.0 <sup>1)</sup> | 0.5               | 1.0               | 1.0     | 1.2  |      |      |
| C組<br>(n = 4) | 1.3    | 0.5  | 1.3               | 0.9               | 0.8               | 0.9               | 2.0 <sup>1)</sup> | 0.0 <sup>1)</sup> | 1.5     | 1.0  |      |      |

注 1) 介入直後

表7 私は家族や他人から期待され頼りにされている

(単位 点)

|               | 1回目・2月 |      | 2回目・4月            |                   | 3回目・6月            |                   | 4回目・8月            |                   | 5回目・10月 |      | F値   | P値   |
|---------------|--------|------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|---------|------|------|------|
|               | 平均値    | 標準偏差 | 平均値               | 標準偏差              | 平均値               | 標準偏差              | 平均値               | 標準偏差              | 平均値     | 標準偏差 |      |      |
| A組<br>(n = 5) | 1.4    | 0.5  | 1.4 <sup>1)</sup> | 0.9 <sup>1)</sup> | 1.4               | 0.5               | 1.6               | 0.5               | 1.0     | 0.7  | 2.31 | 0.04 |
| B組<br>(n = 4) | 0.8    | 0.9  | 0.0               | 0.0               | 1.0 <sup>1)</sup> | 1.2 <sup>1)</sup> | 0.3               | 0.5               | 0.8     | 0.9  |      |      |
| C組<br>(n = 4) | 0.5    | 0.6  | 1.0               | 1.2               | 0.8               | 0.9               | 1.8 <sup>1)</sup> | 0.5 <sup>1)</sup> | 1.0     | 0.8  |      |      |

注 1) 介入直後

この表に基づいて、分散分析を行ったところ、交互作用に有意な傾向が認められた ( $p < 0.01$ )。多重比較を行ったところ、Bグループは2回目と3回目の間 ( $p < 0.01$ ), Cグループでは3回目と4回目の間 ( $p < 0.01$ ) に有意差があった。有意な差がみられた時点は、それぞれ介入の直後であった。

3) 私は家族や他人から期待され頼りにされている

表7は、生きがい感の下位項目である「私は家族や他人から期待され頼りにされている」得点の平均と標準偏差を示したものである。この表に基づいて、分散分析を行ったところ、交互作用に有意な傾向が認められた ( $p < 0.04$ )。

多重比較を行ったところ、Bグループは2回目と3回目の間 ( $p < 0.02$ ), Cグループでは3回目と4回目の間

( $p < 0.02$ ) に有意差があった。有意な差がみられた時点は、それぞれ介入の直後であった。

## 考 察

特別養護老人ホームでグループ回想法の介入を、3グループに時期をずらして介入した結果、生きがい感スケールの得点の交互作用に有意な傾向が示され、回想法介入直後には、すべてのグループにおいて、生きがい感スケールの得点が有意に改善し、介入から時間が経過する中で、改善した生きがい感スケールの得点は持続されず、短期的な生きがい感の向上に効果があることが検証できたといえる。

さらに、個別の生きがい感スケールの得点の変化から、回想法介入直後における、対象者全員の生きがい感得点が減少することはなく、上昇もしくは同得点が示されていた。これらのことから、特別養護老人ホームで入所生活を送っている高齢者への、回想法を用いた介入は、高齢者の生きがい感に影響を与えることが確認できたといえる。

神谷<sup>9)</sup>は、生きがいという語は日本語だけにあり、日本人の心の生活のなかで、生きる目的や意味や価値が問題にされてきた、日本人の人生観を示す観念であると述べている。そして、生きがいの特徴として、その人にとって生きる喜びや生きるはりの源泉になること、実利実益とは関係なく無償の活動であり、ぜいたくの一面がある、やりたいからやるという自発性を持っている、個性的、心にひとつの価値体系をつくる性質を持っている、その人独自の心の世界を作るの、以上7点を示している。

このことから、生きがいとは、ひとりひとりが日々の生活を送っていく上で、生きる意味や目的を見出す重要な意味を持っており、生きがいの特徴から、個性があり、主体的な生活を送っていく上で、生きる喜びにつながる概念であるといえ、在宅居住高齢者と比較して、生きがいを感じる数が少ないとされる施設入所高齢者にとって<sup>7)</sup>、生きがいにつながる支援は大

切な支援のひとつであるといえる。

施設入所高齢者の心理的特徴について、浅野<sup>8)</sup>は、外出の希望などに関する要望を持っていたが、集団生活のためルールが強く、集団の中での安全・安心を確保する機能から日常生活を規制し、要望が聞き入れられないと諦め、施設の方針に合わせていく状況が観察されたと述べ、松岡<sup>9)</sup>は、高齢者は施設に入所することで日常生活の安心感は得られるが、管理された集団生活の中に不安を感じていると述べている。

野村<sup>10)</sup>は、高齢者は生きがいを喪失しやすいものの、再獲得できる能力を持っていると指摘し、鶴若・岡安<sup>11)</sup>は、特別養護老人ホームに入所している高齢者が捉える生きがいの特徴として、過去の生きがいを通して現状の生きがいを捉え、時間の流れという文脈の中で、現在の生きがいを捉えていると述べている。

このように、自宅と異なる施設という集団生活の場において、要望を諦め、精神的に不安定になりやすい環境の中で、生活を送っている施設入所高齢者の心理的特徴を踏まえると、回想法に参加したことは、個別に人生回顧が促され、人生の時間軸における過去の輝いていた頃の自己を呼び起こすきっかけになったといえる。

このことが、自分らしさを取り戻すきっかけになり、この過程を通して、特別養護老人ホームで入所生活を送っている高齢者の、生きがいの再獲得につながったといえる。

また、生きがい感スケールの下位項目では、「私には施設内・外で役割がある」「世の中がどうなっていくのかもっと見ていきたいと思う」「私は家族や他人から期待され頼りにされている」の3項目において有意な改善が示された。

このことを、近藤<sup>12)</sup>が示している生きがい感スケールの質問項目とその因子・概念でみると、「自己実現と意欲」因子では、「私には施設内・外で役割がある」の(意識と目的感)で、「私は家族や他人から期待され頼りにされている」の(役割感)となり、「存在感」因子では、「世の中がどうなっていくのかもっと見ていきたいと思う」の(張り合い感)となる。

このことから、回想法は、生きがい感の中でも、「自己実現と意欲」因子と「存在感」因子と関係が深く、意識と目的、役割感、張り合い感に大きな影響があるといえる。

高野<sup>13)</sup>は、高い生きがい感は、家族や地域社会における多様な社会組織との関係の中で、何らかの自らの役割を果たすことによって、維持された態度として捉えることが可能であると述べ、高間・杉原<sup>14)</sup>は、生きがいとは、趣味の延長上に成果があるのではなく、成果を人に役立てることで価値が見出され、人のために役立つ自分が発見できれば、それが自己実現となると示している。

回想法では、参加者の人生回顧を引き出し、受容する中で他者と共有していく。高齢者自身が語った人生回顧について、参加者同士だけでなく、リーダーやコリーダーも共に傾聴する姿勢が、他者との交流や社会との交流が深まるだけでなく、伝承を通して他者の役に立っている充実感にもつながっているといえる。

特別養護老人ホームで集団生活を送っている高齢者にとって、規則や決まった日常生活を繰り返すことや、身の回りの生活動作において介護を受けているという遠慮から、主体的に自らの意思で生きがいの対象を持つことは困難な面もある。

回想法の介入によって、意識と目的、役割感、張り合い感役割感が向上したことは、自らの意思で行動しようとする積極的な行動につながる心理的变化として、意味深い結果として捉えることができる。

## 結 語

今回の研究結果から、評価尺度を活用し、回想法の介入効果として、特別養護老人ホーム入所者の生きがい感に効果があることが確認できた。

1999年策定の「今後5カ年の高齢者保健福祉施策の方向」(ゴールドプラン21)<sup>5)</sup>には、活力ある高齢者像の構築を図るため、活力ある高齢者像を社会全体で模索することが基本目標とな

り、高齢者にとって、生きがいを持って日々の生活を送ることは重要な意味がある。

加藤<sup>16)</sup>が、高齢期は余暇生活が重要な意味を持っており、生きがいにつながる余暇活動の有無が高齢者の幸福を左右する鍵となると述べているように、高齢者が余暇時間をどのように過ごすかが、生きがいを持ち主体的な生活を送るための鍵になる。

回想法の介入手法はさまざま、高齢者の日々の生活における余暇時間における活動として、いつでも、どこでも、誰でも行える手法であり、生きがいにつながる支援として期待できる。

また、施設入所高齢者の心理的特徴として、様々な負担が強られる傾向を理解したうえで、個人の懐かしい記憶という個別性が尊重された支援の1手法として、回想法は、時間的流れを通して感じる生きがいの再獲得に向けた支援として、位置づけることが可能である。

今後は、腑活化した生きがい感を継続して持ち続けて日々の生活が送れるよう、短期的な介入にとどまらず、日々のケアの中でも自然に回想法が活用できるよう介護職員に働き掛けていくことが重要である。

さらに、人生回顧によって引き出された、その人らしさを活かした日々の生活における支援を、施設におけるアクティビティ・ケアとして、ケアプランに盛り込み、対象者個々に合わせて展開していくことが必要といえる。

## 謝 辞

本研究に際してご協力頂いた、特別養護老人ホームに入所している高齢者の方々、介護職員に心から感謝致します。本研究は、科学研究費補助金(若手研究・スタートアップ2007-2008年)を受けて実施した(課題番号:19830107)。

## 文 献

- 1) Butler, R. N. The Life Review. An Interpretation of Reminiscence in the Aged. *Psychiatry*. 26. 1963; 65-75.
- 2) Webster, J. D. Construction and validation of the

- Reminiscence Functions Scale. *Journal of Gerontology*. 48. 1993; 256-62.
- 3) Haight, B. K. The state of the art as a basic for practice. *International Journal of Aging and Human Development*. 33. 1991; 1-32.
  - 4) 津田理恵子. 回想法への期待～実践研究から考える文献展望～. *関西福祉科学大学紀要*. 11. 2008; 317-32.
  - 5) 近藤勉. 生きがいを測る. ナカニシ出版. 2007; 156.
  - 6) 神谷美恵子. 生きがいについて. *みすず書房*. 18. 2002; 49-75.
  - 7) 津田理恵子. 高齢者の生きがいのイメージと余暇活動. *介護福祉研究*. 16. 2008; 20-3.
  - 8) 浅野仁. 高齢者入所施設における生活の質(QOL)とケア. *中央法規*. 1993; 2-26.
  - 9) 松岡広子. 高齢者施設における入所者の生活の受容に関する研究, 高齢者のケアと行動科学. 2004; 9(2). 22-30.
  - 10) 野村千文. 「高齢者の生きがい」の概念分析. *日本看護科学会誌*. 2005; 25(3). 61-6.
  - 11) 鶴若麻理, 岡安大仁. 語り(ナラティブ)からみる高齢期の生きがいの諸相. *生命倫理*. 2003; 13(1). 150-57.
  - 12) 前掲5).
  - 13) 高野和良. 高齢社会における社会組織と生きがいの地域性, 生きがい研究. *長寿社会開発センター*. 2003; 9. 79.
  - 14) 高間由美子, 杉原利治. 高齢者の社会参加と生きがいに関する研究, *東海女子短期大学紀要*. 30. 2004; 65-75.
  - 15) 内閣府. 平成19年版高齢社会白書, ぎょうせい. 2007; 90.
  - 16) 加藤佳津子. 高齢者の自立と生きがい支援活動に関する研究(1). *仏教大学大学院紀要*. 32. 2004; 161-74.